

論 文

『平家物語』における梶原景季の風流について

Considering "Tastefulness" (Fu-ryu) of Kagesue Kajiwara in the Tale of the Heike

安齋 貢

Mitsugu ANZAI

キーワード：梶原景季、『平家物語』、風流譚、梅、因果思想

はじめに

梶原景季は、『平家物語』の各諸本において多くの武勇譚が伝えられている。それに加え、いくつかの読み本系諸本では、武勇だけでなく、風流を解する人物としても描かれている。中でも、景季の戦において簾に花を挿して戦う姿を描いた場面は有名で、謡曲の『簾』にも採りあげられている。ただ、この景季の風流譚については、読み本系諸本にみられるのだが、諸本によって異同がみられる。『延慶本』・『四部合戦状本』では景季が簾に挿した花は桜であり、『長門本』では梅であり、『源平盛衰記』にいたっては、『延慶本』や『長門本』などで描かれた景季の風流譚が父の景季のものとして描かれている。本稿では、景季の風流譚を載せる読み本系諸本の中から『延慶本』と『長門本』を採りあげてみていくと共に、なぜ景季の風流を解する人物という姿を描いているのかという点について、著者の思うことを述べてみたいと思う。

(一)

まず、『平家物語』の各諸本の中で最も古態を残しているとされる『延慶本』からみていくと、『延慶本』は「武芸ノ道ニモユシキ者ナリケル中ニヤサシキ事ハ片岡ノ桜ノイマタ青葉ナルヲ一枝折テエヒラニ差具テ敵ノ中ニテシハシ戦テ引ケケレハ桜カ風ニフカレテサトチリニケリ敵モ御方モ是ヲ感ケル」と、簾に桜を挿して戦う景季の姿を「ヤサシキ事ハ」と評し、また、重衡の使からの「コチナクモミユルモノカハサクラカリ」という上の句での問いに、景季が「イケトリトラムタメトロモヘバ」と下の句で応えた短連歌の唱和を載せている。ここでの風流とは、戦において簾に桜を挿すこともさながら、その簾に桜を挿すといった行為についての問答を直接的な会話ではなく、短連歌の唱和を用いることで、景季の武士でありながら、「武芸の道」だけでなく、和歌及び連歌の教養を兼ね備えていることを窺わせているところにある。本文に「桜カササセ給テ候ニ申セ」とあるように、短連歌の内容に詠まれている簾に桜を挿す行為の理由は、重衡の生け捕りを暗喩して、<sup>(注三)</sup> どうやら「簾に桜を生ける」と「重衡の生け捕り」と

を掛けていると思われる。

それに対して、『長門本』では、『延慶本』とはほぼ同じ内容が描かれているのだが、「片をかなる梅の、またさかりなるを、一枝折てゑひらにさしくして」と景季が簾に挿した花が「桜」ではなく「梅」という違いがみられる。また、短連歌の唱和も同様に載せているのだが、重衡の使の上の句が「梅かさ、せ給て候に申せ」と述べた上で『延慶本』と同じ「さくらかり」となっている。上の句の桜と梅を簾に挿す行為と矛盾が生じている。ただ、ここでも短連歌の唱和が梅を簾に挿す行為の理由として交わされているので、このことをふまえてみれば、『長門本』の梅も『延慶本』と桜と同様に重衡の生け捕りを暗喩する行為として描かれていることになるだろう。

それではどのような意図をもって「梅」としたのか。桜ではなく梅を簾に挿す理由については『源平盛衰記』に詳しい。『源平盛衰記』では、この『延慶本』・『長門本』で描かれた景季の風流譚が父の景時のものとして描かれているのだが、簾に梅を挿す行為について述べられているので触れておきたい。『源平盛衰記』は、「懸れば花は散りけれども、匂は袖にぞ残りける」と簾に梅を挿す理由、それに加え、梅に関連する『拾遺和歌集』巻一、春、三〇番に入集した凡河内躬恒の和歌を引用している。

(題知らず)

躬恒

吹風を何厭ひけん梅花散りくる時ぞ香はまさりける<sup>(注五)</sup>

この引用された和歌は、風が吹くことで梅の花びらが散ってしまうのだが、その散り際にこそ、梅が一段と増してその香りを放つという。本来ならば、散る花を惜しむところだが、視点を換え、散ることによって得られる美があるという梅の特質を詠んでいるのである。それらをふまえると、桜ではなく梅を挿す理由としては、第一に、散ってもなお香りを残すこと、第二に、散るときに一段と増して香りを放つことという梅の香りにあると考えられる。それでは『源平盛衰記』における梅は何を暗喩しているのであろうか。それは、武士のあるべき姿を梅に見立てているのではなからうか。第一の散っても香を残すということは、死しても名を残すこと、第二の散るときに一段と増して香りを放つということは、合戦という場を梅の散り際に喩え、散り際に一段と増して香りを放つ梅の特質を戦における武士の榮譽を表すものとして見立てていると思われる。『源平盛衰記』は一見、戦と無関係と思われる梅の花を、実のところでは、梅の特質が武士に通じ

るところをあげ、戦の主体である武士の象徴として描いていのではないかと考えられるのである。そこで話を『長門本』にもどすが、『長門本』には『延慶本』に近い本文でありながら「片をかなる梅の、またさかりなるを、一枝折てゑひらにさしくして」・「梅は風にふかれてさとちりければ」・「梅かさ、せ給て候に申せ」と短連歌の唱和の上の句以外、梅となっているところをみると、桜ではなく梅を用いることに対する強い意図が働いていると思われる。『長門本』の梅を用いる意図の根底に『源平盛衰記』と同様の梅に対する意識があったとすれば、『長門本』に描かれた景季の簾に挿した梅には、『延慶本』と同様に重衡の生け捕りを暗喩することに加え、武士を象徴する花という意識が内包されていると思われる。

## (二)

ところで、『平家物語』の読み本系諸本にみられた景季の風流の典拠は、どこにあるのであろうか。それは『吾妻鏡』の頼朝時代の和歌・連歌に関する記述にみることができる。景季の風流について、景季の実詠とされる和歌として『吾妻鏡』に奥州征伐のときに白河の関で詠まれたものがみられる。『吾妻鏡』文治五年七月二十九日<sup>(注六)</sup>。

廿九日、丁亥、白川関を越え給ひ、関明神に御奉幣、此間景季を召し、當時

は初秋の候なり、能因法師の古風思出さざるやの由、仰出さる、景季馬を扣

へて一首を詠ず、

秋風に草木の露を払せて君が越れば関守も無し

この話は、頼朝の一行が白河関を通過するときのもので、「能因法師の古風思出さざるやの由」とあるように頼朝の心に能因法師の和歌が浮かんだのであろう、景季を召し出し、その旨を告げると、景季は頼朝の意を汲んで、当意即妙に「秋風に」の和歌を詠んでいる。ここにおいて、能因の古歌が重要で、景季が能因の和歌を知らなければ、頼朝の意を解して和歌を詠むことは不可能であり、その和歌の教養及び嗜みとがこの話における景季の風流を表している。また、頼朝が景季に和歌を詠ませたところに、他の家臣とは違う風流を解する景季へ対する思い入れが感じとれる。

ちなみに『吾妻鏡』の頼朝時代の和歌・連歌の記載において、梶原一族が関わるものが多い。先の文治五年七月二十九日条の景季の和歌の他に詠作の記載が、

同年八月二一日条に梶原景高の和歌、建久元年十月十八日条に頼朝と梶原景時の連歌、同六年四月二十七日条に住吉に奉納した梶原景時の和歌、その他の和歌に関連するものが、文治二年八月十五日条に景季が西行に名を尋ねたこと、同五年十二月二十八日条に平泉の僧の助公が景時に和歌を詠んだことなど、梶原一族の名が登場する。このことは、頼朝の他の家臣達よりも梶原一族が和歌・連歌といった教養をもっていたことを伝えている。

(三)

さて、『平家物語』の読み本系諸本にみられる景季の風流譚は、単に風流を解する武士ということだけを素材として描かれているのであろうか。

史実としての景季は、父景時が反乱を起こしたことにより、正治二年に駿河国狐崎でその生涯を終えている。当時、景時は、「景時」譚言」というような意識を持たれ、他の御家人からも、そのようにみられていたようであった。この反乱は、結城朝光が二代將軍頼家に謀反を抱いていると景時が譚言したことに対し、朝光と他の御家人達とが、景時を弾劾したことにはじまる。鎌倉を追放された景時は、一族を連れ、相模国に下り、都に向かう途中、駿河で討たれた。そのとき景季も共に在地武士の矢部平次に討たれている。

この反乱において、景季は父景時の譚言がもとで命を亡くしている。命を亡くすという結果からその原因とは何かを考えてみると、それは、やはり父景時の譚言であり、景季の咎ではない。そのことは、景季にとって自らの死という結果に自らによる直接的な原因が存在していないということになる。つまり、父景時の譚言という行為が直接的な原因であり、景季は景時と親子及び同じ一族という間接的な原因によって命を亡くすという結果となったのである。言い換えれば、景季は父の悪縁に引かれ命を亡くしたのである。このような因果観から見れば、景時の悪因のために命を亡くすという悪果に報われた景季に悲劇性が見出されるであろう。勇敢な武士及び風流を解する景季に対し、当時の人々ほどの様な感情を抱いたのかは想像に難しくはない。

史実において悲劇的な死を遂げた景季と『平家物語』各諸本にみられる武勇並びに読み本系諸本にみられる風流を解する武士の景季を一つに結び付けたとき、多くの人々の同情を集め得る人物としての景季の輪郭がはっきりと浮かび上がるのではないだろうかと考えられる。『延慶本』や『長門本』といった読み本系諸本

『平家物語』にみられる景季の風流譚を採りあげる意図には、武勇並びに風流を解する武士としてだけではなく、史実における景季の父景時との悪縁による悲劇的な死を見据え、多くの人々の同情を集め得る人物としての姿が根底にあったのではないだろうか。

注

(注一) 『延慶本』の本文は『延慶本平家物語全注釈』第五本(巻九)による。

※『延慶本』の該当箇所は第五本「源氏三草山並一谷追落事」

(注二) 注一に同じ。

(注三) 『長門本』の本文は『長門本平家物語の総合研究』第二巻、校注篇下による。

※『長門本』の該当箇所は巻十六「一谷合戦事」

(注四) 『源平盛衰記』の本文は『新定源平盛衰記』第六巻による。

※『源平盛衰記』の該当箇所は巻第三十七「景高景時城に入る並景時秀句の事」

(注五) 本文は新日本古典文学体系『拾遺和歌集』による。

(注六) 『吾妻鏡』の本文は岩波文庫本による。